

酵素修飾による大豆たん白質への¹⁵N 標識メチオニンの導入—その生成物の小腸管腔内での挙動

ENZYMATICALLY MODIFIED SOY PROTEIN PRODUCED WITH COVALENT INCORPORATION OF [¹⁵N] METHIONINE : ITS BEHAVIOR IN THE RAT SMALL-INTESTINAL TRACT

荒井綜一（東京大学農学部）・木村廣子（女子栄養大学）

Soichi ARAI¹ and Hiroko KIMURA²

¹ Faculty of Agriculture, The University of Tokyo, Tokyo 113

² Kagawa Nutrition College, Tokyo 170

ABSTRACT

It is known that when a mixture of soy protein isolate (SPI) and L-methionine ethyl ester (L-Met · OEt) is incubated with papain, an enzymatically modified protein (EMP), which has incorporated L-methionine in a covalent manner at to C-terminal, can be obtained. The present study first elucidated that L-[¹⁵N]-Met · OEt was almost similarly incorporated. When DL-[¹⁵N]-Met · OEt was used, the L-isomer was incorporated to produce ¹⁵N-Met-EMP. Using this product, we undertook a feeding test with rats to characterize the behavior of exogenous (dietary) methionine. The test demonstrated that ¹⁵N species existed mostly in an oligopeptide fraction of the small-intestinal content over a period of digestion of the EMP. However, ¹⁵N-Met appeared in the free form in the systemic blood over the same period. It was thus possible by using the present procedure to differentiate the behavior of the fed methionine from that of exogenous methionine. *Nutr. Sci Soy Protein, Jpn.* 7, 14-17, 1986.

大豆たん白質にメチオニンを共有結合状に導入した酵素修飾たん白質(EMP)^{1,2)}の腸管吸収特性を評価するには、内因性窒素、とくに内因性メチオニンの動態を考慮する必要がある。

本研究は、¹⁵N 標識メチオニンを導入した酵素修飾たん白質(¹⁵N-Met-EMP)を調製し、ラットに投与した際の¹⁵N-メチオニンの運命を追跡し、EMP由来のメチオニンの動態を内因性のメチオニンのそれと区別することができたので報する。

実験

¹⁵N 標識酵素修飾たん白質 (¹⁵N-Met-EMP) の調製 :

¹⁵N-メチオニン (95 atom %) を用い、酵素修飾に

先だち、同位体間(¹⁵N-メチオニンと¹⁴N-メチオニン)での反応性(下記)の差異に関する基礎的実験を行った。

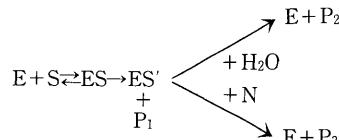


Fig. 1. Michaelis-Menten kinetics of protease reactions

E : enzyme (protease, e. g., papain)

S : substrate (protein)

ES : Michaelis complex

ES' : acyl-enzyme (or peptide-enzyme)

P₁ and P₂ : hydrolysis products

N : nucleophile (amino acid ester)

P₃ : aminolysis product

まずFig. 1 のように、酵素 (E) としてパパイン、基質 (S) として馬尿酸エチルエステル (Bz-Gly-OEt)、求核試薬 (N) として¹⁵N-Met-OEt (対照として¹⁴N-Met-OEt) を用いて生成物 P₃ (Bz-Gly-Met OEt)を得た。E/S 比を 0.01、温度 37°C、pH を 6 に固定し、N の濃度を変え、経時的に P₃ の生成量を測定した結果、¹⁵N-Met からの P₃ 生成速度と¹⁴N-Met からのそれと大きな差異はなかった (Table 1)。この導入反応は D 型 Met・OEt によって阻害されず、DL 型 Met・OEt の使用が可能であることを確認した。¹⁵N-L-Met は価格の面から大量使用は困難であるため、¹⁵N-DL-Met・OEt を用い、SPI にメチオニンだけが¹⁵N 標識された EMP を調製した。調製条件は既報¹⁾に準じた。

Table 1. Reaction rates and kinetic parameters of L-[¹⁴N] methionine and L-[¹⁵N] methionine

	L-[¹⁴ N] Methionine	L-[¹⁵ N] methionine
Concentration of methionine	Incorporation rate (mM/min)	
0.5 mM	1.5	1.3
0.7 mM	1.8	1.6
0.9 mM	2.0	1.7
1.9 mM	2.7	2.2
K _m	0.42 mM	0.41 mM
V _{max}	0.26 mM/min	0.23 mM/min

Incorporation rates were calculated from increases in hippuryl-methionine ethyl ester during 3 min.

¹⁵N の測定はすべて発光法により、¹⁵N アナライザ (日本分光 NIA-150 型) を用い¹⁵N/¹⁴N の比より算出した⁴⁾。

動物実験:

飼料として窒素含量が 1.5% に相当する¹⁴N および¹⁵N-Met・EMP (全飼料中では約 10%) を配合し、他の栄養素は Harper 組成⁵⁾とした。

被検動物にはミールフィーディングを学習したウイスター系雄ラット (7 遅齢) を用い、実験期にはまず非標識 EMP を 5 日間投与し、解剖日だけ¹⁵N-Met・EMP を与えた。摂食後、経時に小腸管腔内容物を採

取し、膜済過 (アミコン UF101) にて分子量別に分画し、500 ダルトン以下、500-1,000 ダルトン、1,000-2,000 ダルトンの画分を得た。次いで、各画分中の Met 量と¹⁵N を測定して¹⁵N および¹⁴N-Met の存在比から、EMP 由来のメチオニンの挙動をしらべた。同時に、摂食後、経時に心臓より採血し、血液中の¹⁵N-Met (遊離型) を定量した。

結果と考察

前述に従い SPI に¹⁵N-DL-Met を導入したメチオニン含量 4.98% の¹⁵N-Met・EMP を得た。この EMP の¹⁵N 存在比は 3.607 atom % であった (Table 2)。

Table 2. Amino acid composition and other properties of ¹⁵N-Met・EMP_s

Amino acid	Content(%)
Lys	6.05
His	2.30
Arg	7.14
AsX	10.11
Thr	3.57
Ser	5.25
GIX	18.25
Pro	5.22
Gly	4.16
Ala	4.19
Cys	1.43
Val	4.64
Met	4.98
Ile	4.70
Leu	8.36
Tyr	3.56
Phe	5.00
Trp	0.98

¹⁵N : 3.607 atom%, M. W.: 1,000-8,000

腸管腔内の総メチオニン量と¹⁵N 測定により得られた食餌由来メチオニン量の経時的な変化を Fig. 2 (下半) に示した。両者の差を内因性メチオニンとして Fig. 1 に空白部で示した。摂食開始後 2 時間でメチオニン量が最高であり、その中で食餌由来メチオニンは 72% を占めていた。また内因性メチオニンの総量は経時に大きな変動を示さず、摂食直前にはほぼ等しいことが判明した (Fig. 2)。

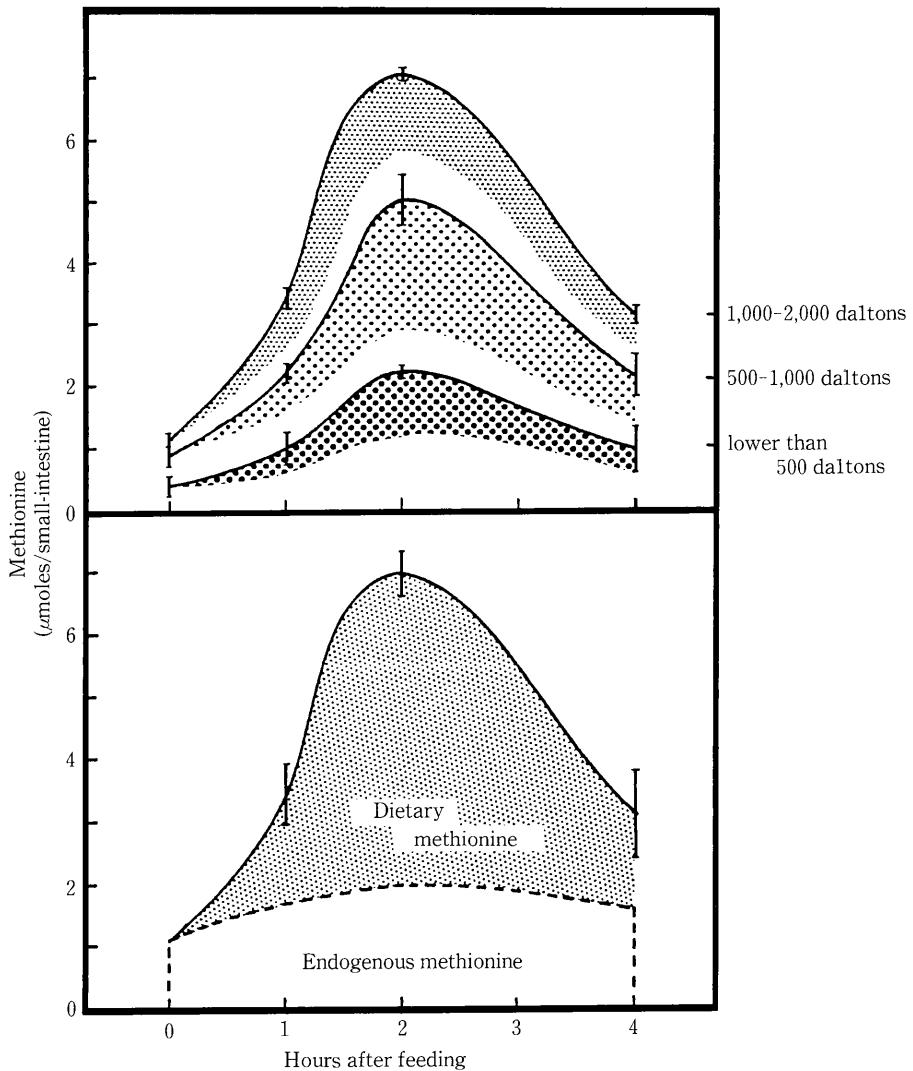


Fig. 2. Time-course of changes in various form of total and dietary methionine levels in the small-intestinal tract

さらにこの小腸管腔内容物の500ダルトン以下、500～1,000ダルトン、1,000～2,000ダルトンの画分について¹⁵Nの存在状態から食餌性メチオニンをしらべたところ、摂食開始後1～2時間で、500～1,000ダルトン画分に多量に存在することが判明した(Fig. 2 上半)。内因性メチオニンは分子量画分ごとにみても、経時的にみても大きな変動がなく、摂食開始時のパターンに近似していると推察された(Fig. 2 上半空白部)。

血清中の¹⁵N存在比から求めた遊離型¹⁵Nメニオニン量は、摂食1時間後既に上昇し(0.34 mg/血清1 ml)、小腸管腔内の¹⁵N-メチオニンが減少した4時間目にいたっても持続していた(0.333 mg/血清1 ml)。

以上の実験により、SPIから調製した酵素修飾たん

白質に共有結合状に付加しているメチオニンは、小腸管腔内で大部分は遊離型へと加水分解されることなく吸収され、吸収後にはじめて遊離するという前回報告¹⁾の知見を、より正確に検証した。また、内因性メチオニンと区別したかたちで食餌性(EMP由来)のメチオニンの動態を明らかにすることができた。

文 献

- 1) 荒井綜一(1981)：酵素修飾による分離大豆たん白質の必須アミノ酸パターンの改良とその評価。大豆たん白質栄養研究会会誌, 2, 23-26.
- 2) 荒井綜一(1982)：大豆たん白質の酵素修飾によるペプチドの調製とその栄養特性の評価。大豆たん

- 白質栄養研究会会誌, 3, 13-17.
- 3) 木村廣子, 庄子由美子, 谷本信也, 荒井綜一
(1982) : 酵素法による蛋白質への¹⁵N 標識 L-メチオニンの共有導入. 第36回日本栄養・食糧学会講演要旨集, p. 79.
- 4) 木村廣子(1983) : 発光法による¹⁵N の測定, 臨床検査. 27, 506-511.
- 5) Harper, A. E. (1959) : Amino acid balance and imbalance. *J. Nutr.*, 68, 405-418.